

列島保全への課題



三内丸山遺跡（青森の魅力提供 <http://aomori-miryoku.com/>）

わが国、 国土への働きかけの歴史①

わが國土は縦豊かで自然に満ちているようだが、そのほどどんどは日本人が長い年月をかけて築きあげてきたものである。農地や都市はいうに及ばず、森林も里山もわれわれの先人たちの成績品なのであって、自然そのままで人の手が入っていないのは、北海道の知床や青森・秋田県境の白神山地などごく少ない小さなエリアに限定される。

し、耕地を開き、治山を行つて河川を改修し、道路や港湾・空港を整備し、都市環境を整えてきたからいふでもあることなのである。

人の暮らしは国土があつて
ことのものだし、国土への働きかけは人の暮らしに反映されてこそ成果となる。

るな手段で働きかけ、その結果として国土から恵みを得て
いる。安全な暮らししができるのも、ヒトやモノが効率的に
移動できるのも、快適で心地よい暮らししができるのも、長い年月にわたり、森林を整備

日本人の祖先となる集団が、日本列島へ最初にやつてきたのは今から3～4万年前と考えられるが、1万年前から始まる地球温暖化とともに、森林や海岸での採集や狩猟によつて食料を確保し、人々が小集落に分散して暮らすという縄文時代を迎えた。世界で最初に土器を発明したのは、この縄文人であつた。これはヨーロッパで土器が見られるようになる5000年も前のことであつた。

遺跡の発見は、その常識をかなり覆した。集落には数百人の居住があつたといわれ、相當に大きいものだった。

ということは、その集落をまとめたための一定の権力が必要だったとも考えられる。

段階にどどまつており、少人数の集落から成り立つていたというのが長い間の歴史学の常識であった。しかし、1994年の青森の三内丸山遺跡の発見は、その常識をか

荒やエニ・ヒミタケ、ゴボウ・マメなどの一年草の栽培植物も出土している。こでは多数の堅果類樹木や一年草を栽培していた可能性がある。

すでに栽培という形態で国土を利用するという方法を身につけていたことが明らかである。遺跡からは多数のクリ・クルミ・トチなどの堅果類の殻の、二ガマシ・ヨウツブン、

西日本で
るとやや異
た。自然の
林帯ほどで
を主とした
採集・狩猟
が発達し

国土と
災害大国の
大石久

は東日本と比べ異なる特色が現れ、恵みが落葉広葉樹ではないため、雜穀の焼畑農耕文化が、魚撈に補われたのである。ここ

G空間EXPO2012開催

スマートフォンの普及で、日常生活や経済活動で急速に重視され始めた地理空間情報――「G空間情報」の利活用を促進しようと6月、「G空

発展途上で国際競争も激しい。日本は2007年、地理空間情報活用推進基本法を制定し官民挙げて普及促進に取り組んでいる。

組織が、新たな研究開発やニュービジネスの提案、体験イベントなどを展出、30余のシンポジウムが行われ、約1万9000人が参加した。

国土基本図
間情報システム
用する優れ
アやコンニ
国交省国

富士地理院は、電子
回路などのデータを活
用したGIS（地理空
間情報管理技術）
システム「ソフトウエ
アエンツ」を顕彰する
立体地図画像

人々が小集落に分散して暮らすという縄文時代を迎えた。世界で最初に土器を発明したのは、この縄文人であった。これはヨーロッパで土器が見られるようになる5000年も前のことであった。

つままり、狩猟採集の段階に
といひもつっていたのではなく、
る。しかし、食糧を求めて転々と移動
して採集を続けるのではなく、
く、かなり長い期間、一定の
場所に留まつていたことにな
るもの栽培していたとする
い。

や色彩が異なる。典型的な縄文文化は、東日本の落葉広葉樹林帯の自然の中に成立した。そこでは、東北アジアと同様、狩猟と魚撈に加えて、西日本よりはるかに豊かな堅果類の恵みを享受した採集経済が安定して當まれた。

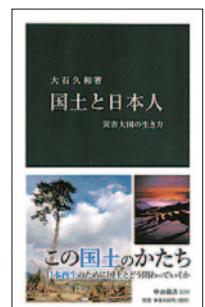
日本文化が広がる
降、水田稻化を中心
が、その基
文化と照葉
ような違い
である。

化は、弥生時代以降に再編成されていく。雪原に落葉広葉樹林と樹林文化とのこの関係が存在しているのが、森山哲学者で歴史学者の梅原猛氏は、「縄文文化」の基礎文化としているが、森山によると日本人の縄文文化は、われわれのものよりも大きな影響がある。

■
わが国の国王への働きかけの歴史について紹介する。

この発見は、われわれ日本人
人がついに国土に働きかけて
国土から恵みを得る民となつ
たことを示す。単に採集する
という段階から、「耕作し栽培
する」という画期的な一步
を踏み出したのである。

国土と日本人 災害大国の生き方



本書では、日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気付くことの出来る好著。